
「ペンリ屋 翔」の日常

二階藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ベンリ屋 翔」の日常

【Nコード】

N1422F

【作者名】

二階藤

【あらすじ】

今までの探偵業を辞めて、ベンリ屋を始めると言い出した赤居智志と、それに巻き込まれる形となってしまった翔。2人（？）の明日はどっちだ？

第1話「ペンリ屋はじめました」（前書き）

以前に連載をしてすでに完結している小説の登場人物を使った別のお話です。ゆっくりとお楽しみくださいませ。

第1話「ペンリ屋はじめました」

街の喧騒の中に立ち並ぶ雑居ビル。

その雑居ビルの中に並んで、外見だけ見ればアパートに似た形状の建物があった。

2階建てで、ほぼ正方形で、外からは上の階に上がるためと思われる階段が付けられていた。

事情を知らない人からすれば、この建物はどう見てもアパートであった。

玄関だと思われる引き戸の脇に設置されたポストの近くには、インターフォンが取り付けられ、申し訳程度に付けられている『赤本探偵事務所』と書かれた表札があった。

「…だから、ここはアパートとかじゃ無いから、空き部屋とかっていうのは無いんだって…」

玄関の辺りで、表札を指しながら、何やら説明をしている男と、それを聞きながら、肩を落とす学生らしき青年がいた。

「…そうでしたか…わかりました…」

そう言つて、肩を落としたまま、青年はとぼとぼと歩いていった。

アパートに似たこの建物は雑居ビルの間にあるものの、大学の近くで、駅まで10分とかからないなど、住む上での好条件を取り揃えていた。

そのためか、アパートと勘違いしてインターフォンが鳴らされることが多々ある。

その都度、この建物の主である、赤居智志は、アパートではない旨を、表札を指しながら説明する。

春に近い、新生活が始まるような今の時期には、説明する頻度が日増しに増えていた。

「おや？新しい入居者でも決まったかい？」

智志が建物内に戻ると、奥の方からそう問い掛けられた。

「…翔、知つての通りここは…」

「『アパートじゃない』…だろ？…でも、零細企業も良いところだ、違うかい？」

一呼吸置いて、智志から、翔と呼ばれた人物が続ける。

「副収入とかも考えないと、ずっと今のままだよ？」

奥から黒猫がのそのそと出て来て、智志を見上げて「にゃあ」と鳴いた。

「言いたい事言つて、飯をたかるとは…その辺は、見習いたいな…
つたく」

文句を言いながら、買い置きしてあつた猫缶を器に開けて、猫の前に置いた。

それを確認した黒猫は、うなづくでもなく頭を揺らしてから、今用意された食事にも口をつけ始めた。

「そうだ、まだおまえには言っていなかったな…？」

唐突に、智志が口を開き話を切り出し、それに反応して、翔が聞き返す。

「なにをだい？」

翔からの当然の返答に、智志はさりとて言い切った。

「『赤本探偵事務所』は、今日付けで畳むことになったから」

いきなりの発言に、一瞬びくつと反応した翔だったが、小声で、

「…ついに、夜逃げでも決意した…？」

智志に問い掛けられた。

「違う、違う。…探偵業をやっているも儲からないから、本格的にベンリ屋業にでも移行しようと思つてな」

そついいながら、何やらチラシらしき紙を取り出してきて、翔の前

に広げて見せた。

「…そんなものまで作っちゃって…え〜っと…『ベンリ屋、始めました』…『赤本探偵事務所は、ベンリ屋 翔に…』って、なんで、勝手に僕の名前を使っているのさ!？」

「まあ…あきらめてくれ…今日からここは『ベンリ屋 翔』になったから」

「僕の権利は？」

「養ってるんだから、それくらい我慢してくれよ、なっ？」

「…いつも、特売品の買い置きじゃん」

「儲かったら、還元するから」

「ふう…どうせ、あんたの事だから、文句言っても、覆さないんだろ…？」

「まあ、そういうこと…ついでに、コレな」

そういいながら、智志は、表に掲げられている表札より一回り以上大きい、『ベンリ屋 翔』と書かれた板を翔に見せ付けた。

「…善は、急げってな？」

「…僕には、悪意の塊にしか見えないね…」

「そうか?…結構よく出来て…」

「事後承諾で、看板作成済みな事が…だよ？」

「まあ、そういうなって!…じゃあ、表のと交換してくるからな!」
そういつて、智志は、事務所から出て行った。

「…僕の主張は、いつも通り無視なんだね」

部屋には、翔のため息交じりの言葉だけが残り、表の看板が付け替えられたところには、すでに日も暮れかけていた…。

「便利屋をはじめると言っただって…そんなノウハウ持っていたのかなあ…？」

翔がそんなことをばやし始めたところに、智志が意気揚々と戻ってきた。

「便利屋をはじめるにあたって何が必要かを考えていたんだが…や

はり知名度か？」

「…技術だよ」

智志の言った言葉を覆すかのように、翔がポツリと一言だけ言った。

「技術…ねえ…たとえば？」

「…君、本気で便利屋をはじめようって考えているの？」

「一応な！」

「ふう…じゃあ、まずはペット探しからでも始めなよ…需要だけは
确实にあるし、それなら手伝えるからさ…」

「お？手伝ってくれるって言うのなら、その言葉に従おう…てか、
ペット探しかあ…もつと、大きな…」

「文句があるなら、僕は帰るよ？」

翔のその言葉を聴いて、智志は少し黙り込んだ。

「…じゃあ、早速、そのチラシを配ってきなよ…僕は僕のほうで、
仕事を探してくるからさ」

「わかった…！じゃあ、頼んだぞ…相棒！」

「ふう…僕は、自分の生活向上のためにがんばるからね…君は、ち
やんとに接客をこなしてね」

智志は、さつき広げたチラシを抱えて駅のほうへと出かけていった。

翔は、その後姿を不安げに見つめながら、

「僕が何とかしないとだめなのかなあ…」

と、さつきよりも深いため息をしながらつぶやいた。

黒猫が『ベンリ屋 翔』と書かれた看板を憎々しげな眼で見上げ、
その場を去っていった。

その頃、駅では、チラシを抱えた男が大声で宣伝をしていた…。

「『ベンリ屋 翔』！はじめました〜！よろしくお願いします〜！」

第2話「翔からの質問」

「ねえ、智志…1つ聞いていいかい？」

翔が智志に対して言葉を発した。

翔から質問すること自体は大して珍しいことでもないらしく、智志は返事をするわけでもなく、頭をかきながら軽く頷いた。

「勝手に聞け」とでも言いたいような様子でもあった。

「あれさ…智志って何で生きているの？」

「…いきなり、ご挨拶だな」

その日の翔の様子は普段通り振舞っている感じではあったが、どことなく落ち着いていない様子が見て取れた。

何かそわそわとしているように見えていたのだが、智志はあえてそれを気にすることなく、いつも通りに接していた。

重大な事とか、言いたいことがあれば、智志のほうから質問するまでもなく勝手に話し出すことを知っていたからだ。

そして、智志の考えていた通り、翔のほうから出された『言いたいこと』であつたと思われる質問を聞き、智志はどう答えればいいのかもわからない状況下に陥れられた。

「…なんというかな、お前はアレか、俺に死ねと言いたいのか？」

智志は翔からの質問に対して、少し迷いも含めつつ答えた。

その回答を聞き、翔は少ししまったというような表情をしながら言葉が続けた。

「ああ、ゴメンゴメン…ほら、僕もそうだけども、智志って結構適当に生きてるだろ？だからさ…なんとなくというか」

「…なんとなくで、俺の人生自体を否定されそうなことになったのかよ…確かに、適当に生きているって言うことは否定できないが…なんでだ？」

「ん…なんていうかなあ…僕自身もさ…結構長生きしているからさ…生きる目標って言うのかなあ…そういうのが、いまさらながら良くわからないんだよね」

智志は、翔にしては珍しく弱気とも取れるような発言をしたので少し驚いた表情をしてから少し考え込んだ。

「お前にしては、珍しく殊勝な考えじゃないか…長生きか…俺の倍くらいか？」

「う…ん…どうだったかなあ？…その辺のことは良く覚えていないや」

「まあ、俺より長生きなんだから、お前のほうがそういう答えについて良く解っているんじゃないのか？」

「たぶんそうなんだけど…客観的な意見というか…そういうのを聞きたかったんだよね」

「意見ねえ…なんというかな…そういう面倒くさいことを考えるのは、大学を卒業したくらいに止めたんだよ」

「めんどくさい…ねえ…確かにそうだ」

「だろ？…だから、今は、死にたくないから生きている程度の目標しかないんだよ…俺はな」

「ふ…ん…それって楽しいかい？」

翔のその言葉を聞いて、智志は再び考え込んだ。

「さあ…楽しいかどうかは…結果論にしかないしなあ…」

「…結果論…か」

「まあ、俺はそう思うことにしているのさ…で、今日は仕事がないのか？」

智志からの突然の振りに、翔は少し口ごもってからいつものような態度に戻った。

「僕に頼りすぎなのは良くないと思うよ？」

「…ふう…やつといつも通りか…まあ、俺自身が生きて行くためにも頼らせてもらうさ」

いつもの翔の様子に安心したような表情を見せた智志が翔に言った。

「…僕、そんなに様子がおかしかったのかい？」

「この世が終わりにでもなるかのような様子だったぜ？」

翔の少し気落ちしたかのような台詞に、智志はふざけ半分で答えた。

「…今日は、仕事もなかったし帰る」

不機嫌そうな声を漏らして翔はきびすを返して、部屋から出て行った。

「悪かった悪かった…明日は、『特別製』の食事を用意しておくから仕事を頼むぞー！」

去っていく翔の後姿に、智志は大きな声で用件を伝えた。

「…しばらくは、僕の生きている目標は食事でありつくっていつかとでいいかな？…確かに考えるの面倒だし」

翔はそんなことを思いながら、智志の『特別製の食事』という言葉
を背中に聞いていた。

「…もう少し、張り切っていい仕事でも見つけられればいいかなあ
…なんか、智志に好いように使われているのは癪だけだね…」

翔はつぶやきながら、智志が生きたために待っている仕事を探すためにその場を後にした。

第3話「零細企業なのに大丈夫？」

その日は、とてもよく晴れた日だった。

前日までの数日間は大雨と小雨を繰り返して、曇天模様が続いていた。

その数日の間、智志は外へ出かけることはなかったし、天気が崩れる前に出かけていった翔も、

その雨の間はどこかで雨宿りでもしていたのか、智志のいる事務所に姿を現すことはなかった。

「…ヒマだ」

智志がつぶやくように言った。

智志自身が仕事を得るために出かけるようなことはほとんどなかった。

仕事の依頼を請け負うもしくは、依頼人が来るようにどうにかして仕向けているのは、翔の仕事だった。

それ故に、翔の来ないこの数日間はずっといいほど実りのない日々となっていた。

『…カリカリ…』

事務所のドアを引っ掻くような音が響き、智志は表情を少し明るくさせた。

「…やっときたか」

そんなことをつぶやきながら、事務所の引き戸を開けた。

「お前だったら、開けてもらうのを待つまでもなく開けられるだろう？」

少し皮肉っぽく、数日ぶりに智志の前に来た来訪者に言い放った。

「だって、自分で開けるのって面倒くさいじゃん…開けてくれる人がいるなら、その人に開けてもらうのが一番さ」

そんなことを言いながら、開けられた引き戸をすり抜けて事務所の中に入ってきた影があった。

数日前に出かけてそのままだった翔が事務所に戻ってきた。

「…で、ここ数日はどこで何をしていたんだ？」

数日ぶりに戻ってきた翔に智志が質問をする。

「ん？君は、僕の奥さんかい？…それとも夫？」

「平たく言えば飼い主かな？」

「…僕は飼われる予定も、飼われるつもりもないの」

「知ってる…で？」

いつも通りのやり取りだったらしく、智志は最初の質問の答えを促すように語気を強めて言った。

「いつも通り適当にふらふらしていただけさ」

その言葉を翔が良い、いつものように黙り込んだのを見てから智志が動き出す。

「…ここに戻ってくるって言うことは、あんまり良いモノにはありつけてなかったって事か？」

そんなことをいいながら、いつものように翔の食事の準備を始めた。
「うゝん…ここより良いモノにありつけることは結構あるんだけどね…飼われそうになるしさ」

「なるほどな…まあ、本性を知っていれば、お前を飼おうなんて奇特なことを考えるやつはいないだろうさ」

智志は、翔の言葉を話半分程度に聞きながら言葉を返して、翔の前に準備した食事を置いた。

「上げ膳据え膳になるのは、どこでも同じなんだけどね…君のころが一番気楽でいいよ」

「…まったく、良いご身分だな」

「おかげさまで」

「…そういえば、僕はここ数日ふらふらしていただけだったけど、

君のところには依頼者は来たのかい？」

「ん？…そうだな、新聞の勧誘くらいは来ていたぞ」
冗談っぽく智志が答えた。

「…いつものことだけど、僕がいないときって本当に依頼者来ないんだね…」

「こないというか…ほら、俺って営業していないだろ？…最初のときのビラ配って以来…だから、ココの仕事はお前の営業任せだからさ」

「…そんなことを自慢げに言われてもね…大体気になっていたんだけど、そんな状態で、どうしてココの事務所は経営できてるのさ？」
「まあ…ほら、金銭的に困っていることってほとんどないしな？…だから、どうにかなっているんだよ」

智志のその回答に、翔は目を丸くして黙り込んだ。

「…金銭的に困っていないって…こんな零細企業なのに！？」

黙り込んだ翔が一番最初に言ったことは至極当然のことだったが、少し興奮気味の様子に、智志は少し驚いた表情になった。

「あ、ああ…一応、金銭的には困ってないぞ？…そうじゃなきゃ、お前を養うようなことはしていないし…そもそもできないだろ？」

「…確かに…でもなんで？」

「親の財産…と、言いたいところなんだけどな…まあ、一言で言う」と、親の教育の賜物っていうやつかな？」

「親の教育…？」

智志から出された意外な回答に、翔は珍しく考え込むように黙り込んでしまった。

「何から話せばいいかなあ…俺って、高校のころから一人暮らしを始めたんだよ…事務所として使っているこの場所で」

「…そんな前からここに住んでるの？…てか、ここって智志の持ち物？」

「もともとは親のな…で、その時に、『この建物と現金100万以上は高校の授業料以外出さないからそのつもりで』っていわれてな」

他人事を話すかのように智志は淡々と話した。

「…ん？高校生活は100万円持ってスタートしたって事？…結構リッチな生活できたんじゃないの？？」

「…普通に考えればな」

智志は少し気落ちしたような表情になった後に言葉を続けた。

「親は大学まで行けという割りに、高校までしか教育費出さないって断言したからな…大学関係の金のことで頭抱えることになったんだよ…今思えばその時点だな」

「…今思えばって言うことは…？」

「にわか金持ちだからな…高校2年くらいまでは何も考えないで適当に金使ってたんだよ…で、大学進学を考える時期になって親に確認したら…」

「…大学の費用は出さないから自分で何とかしろ…って感じかい？」

「…そういうことだ」

話せば話すほど声のトーンが下がっていく智志の姿を見て、翔は少し同情し始めていたが、疑問に当たった。

「…ん？結局お金はどうしたんだい？」

「ここからが、今の金銭的な余裕がある話につながってくるんだけどな！」

智志は、翔からその疑問が出てくるのを待っていたかのように、声を弾ませて言った。

「残った金額を増やすことを考え初めてな…とりあえず、投資を始めてみたんだよ」

「投資！？…株とかそういうやつ？」

「ああ…まあ、最初のうちは結構損したりもしたんだけどな…流れにうまく乗せることができてな」

先程までの下がった声のトーンが嘘のように明るい口調で智志は言葉を続けていた。

「…さっきまでの話はこれの前振り？」

「…いや、そういうされるとそれまでなんだけどさ…実際、結構きつ

かつたんだよ…その頃は」

明るい口調がまた、少し低いトーンになりしみじみと語った。

「まあ、おかげで今の生活があるんだけどな…」

「…なるほどね…人に歴史ありってやつ？」

「そんなところさ」

「零細企業が経営できている謎ははつきりと解けたよ…仕事がないても大丈夫なわけだ…」

翔はあきれているとも取れるような口調でため息混じりにつぶやいた。

「…いや、仕事がないのは退屈だから困る！…で、なんか仕事ないの？」

そのつぶやきに対して、智志は強い反応を見せて、翔に詰め寄った。その様子に、翔は少し驚きながらも答える。

「いつものペット探しなら、すぐにでも手配できるけど、それでいいかい？」

智志は、その回答に少し不満そうな表情を見せて少し考え込むフリをした。

「…まあ、退屈になるよりはいいか…その仕事はいつから始められる？」

翔はすでに智志のその回答を知っていたのか、首をかしげながら言葉放つ。

「え…つとね…」

『ピンポン』

インターフォンが鳴り響く音を待っていたかのようにして、翔はかしげていた首を元にしてから言葉が続ける。

「今」

智志は、翔のいつもの態度を見て、インターフォンがなるとほぼ同時に、入り口である引き戸のほうに移動を開始していて、翔の言葉は背中で聞く形になっていた。

「金銭的には余裕でも仕事好き…ねえ…殊勝なことだ」

翔はそうつぶやきながら、事務所の奥にあるいつもの定位置に向かった。

「…やっぱり、ここが一番住みやすい場所だよ」

そんなことを思いながら、やってきた依頼人と智志の会話している様子を背中で聞いていた。

第4話「『赤本探偵事務所』の由来」

その朝、智志は悩んでいた。

『便利屋 翔』という看板を掲げてから、幾度となく悩んでいたことであるため、

本人の中でも、いまいち答えが出ずに困っているところでもあった。

「どうしたの智志？…投資した会社でも潰れた？」

飄々とした様子で、翔が智志に声をかけてきた。

「…縁起でもないことを言うなよな…大体、俺がそんな会社に投資するわけないだろ」

「…自分の会社は風前の灯なのにねえ…」

皮肉っぽく翔が言葉を漏らした。

「良いんだよ、ほかの会社ががんばってくれば、俺の会社も潤う…それがこの事務所の信念だからな」

「…自分で稼ぎなよ…」

ため息混じりに翔がつぶやいた。

「つと、それよりも、さつきから悩んでいるようにため息みたいなのしているけどどうしたの？」

「ん？ああ…ほら、ここの事務所を、お前の好意から『便利屋 翔』に変えただろ？」

「…僕には、そんな好意を持ち合わせた記憶はないんだけどね…で？」

「それでさ、前の看板の処分に案外困っているんだよなあ…」

「ふん…捨てれば良いんじゃないの？」

翔のその言葉に「そうなんだよな」とつぶやきながらも、智志は悩み続けていた。

「…そういえば、智志の苗字は『赤居』だったよね？…確か」

「ああ」

「…じゃあさ、こっちの『本』って誰？」

翔のその質問に智志は少し答えづらそうな表情を見せながら言葉を選んで話した。

「…まあ、平たく言えば、ここの事務所を立ち上げた際の、俺の相手だな」

「へえ… 2人で立ち上げたんだ…で、その相手はどこに？」

「…さあな、立ち上げて、結構すぐに居なくなっただけだからなあ…どこでなにやってるやら…」

どこか、あいまいさを残すようなしぐさをしながら智志は答えた。

翔は、何か怪しいと思ったものの、それ以上の詮索は無駄に終わってしまう気がして話を切り上げる。

「まあ、捨ててもいいかはその人の行方がわかってからでいいんじゃないの？ おいておく場所はあるんだし」

「…それもそうだな… 適当においておくとするか！」

翔の言葉に、少し大げさに反応を見せた智志だったが、答えた割りにどこか、まだ悩んでいる様子のまま、

看板を抱えて、上の階の半ば物置と化してい部屋に置きに行った。

ここの事務所は無駄に広い。

部屋数だけを見れば、多いというわけでもないのだが、上の階には、1 2 畳ほどの部屋が2部屋に、

6 畳程度の物置部屋と化している部屋が1つあった。

しかし、主に使われているのは、1階のみで、智志自身も荷物を持ち上げる際に上がる程度で、

それ以外はほぼ1階で生活をしている。

翔にいたっては、1階置くにある部屋にいるか外に出ているかなので、まず2階に上がることはなかった。

2階の物置部屋には、改名前の事務所で使っていた小道具などがしまわれていて、

本日、看板もはれて仲間入りとなつたわけだった。

「それにしても、ここって無駄に部屋が多いよね…何に使うの？」

「うちの親の趣味みたいなものだからなあ…皆目見当もつかないさ」

「智志が、『仕事場』って呼んでいるところってやたらと広いんだけど…？」

「あそこは、もともと青柳って貝をむくのに人が集まっていたところなんだよ」

「青柳？」

「ああ…一部で『バカ貝』なんて呼ばれているけどな」

「へえ…その豆知識は生活の役に立つ？」

「役に立つと思うか？…で、その貝の関係ででかい冷蔵庫と冷凍庫が1基ずつ置いてあったからな」

「それで、あんな広さがあるってことかあ…今は使っていない？」

「ここを親からもらうときには、すでにやめた後だったからな」

「他に部屋が多いのもその関係？」

「概ね…な。元々、俺の一家はここに住んでいたんだし部屋数が多いのもそのせいさ」

「なるほどね…」

ふと、翔は、今朝方智志が迷っていた看板のことを思い出す。

「…ところで、『本』の人の正体は？」

「…ふう…聞いても面白い話じゃないぞ？」

智志は、再度翔から出された質問に答えるのを渋るような態度をとった。

翔は、少し考えるように首を傾げてから、縦に首を振る。

「…大学を卒業するくらいに、俺は就職難ってやつに巻き込まれていて、どうしようもなかった」

思い出すように智志が言葉を発し始めて、翔は黙ってその様子を見ていた。

「で、同じクラスで、やっぱり就職がうまく行かなかったやつがやつてきて声をかけてきたんだよ」

「ふ〜ん…」

「そいつが、『本』の正体の『山本哲哉』って男さ…大学入学時から仲は良くてな」

「なるほどね…『赤居』と『山本』で『赤本探偵事務所』ってことか…」

「まあ、そういうことだ…で、さっきも言ったように、哲哉のやつは現在行方知れずなのさ」

「いつごろから？」

「大学卒業して、就職難が多少落ち着いたところからかなあ…？」

「街中ですれ違ったりもしたんじゃないの？」

「そういうことはほとんどなかったなあ…運が悪いんだか良いんだか…」

「ふ〜ん…で、その山本さんは何で辞めちゃったの？」

翔のその何気ない一言を聞いて、智志は黙り込んだ。

ただならぬ雰囲気翔は感じたが、智志から出てくる言葉を待つしかなかった。

「…婿養子とやらで、仕事ができなくなったんだとさ…」

「ああ…それで行方知れずに？」

「『姓が『山本』から『平嶋』に変わるから、探偵事務所の名前とも合わなくなる』とか言っただけで辞めていったんだよ」

「それはまた…災難だったね…」

「…まあ、あいつは結構適当な人間だったしな…すぐにやめてどっかにいくとは思っていたけど…」

負け惜しみを言うかのように、智志はその言葉を搾り出して再び黙り込んだ。

「…この事務所を作るときの俺は、超がつくくらいに真面目だったんだがな…まあ、あいつのおかげですべて崩れたさ」

「…真面目え！？…君が??」

ぽつりと言った智志の言葉を聞いて、翔が笑いながら智志に聞き返す。

「まあな…大学ときは投資しつつも金が必要だったから真面目にならざるを得なかったのさ」

「…妙に説得力のある話だね…」

「そんなだったから、哲哉みたいな適当な人間に捕まっちゃったんだけどな」

「ははっ、それはいえているかもね」

「まあ、事務所の由来の話はそんなところさ」

一通り話し終えて、智志がその話に終止符を打つ。

翔は、それ以上聞くこともないことを悟って、何も言うことなく玄関のほうに向かって歩き出していた。

「ん？今日はどこに行くのか？」

翔の行動を見て、智志が声をかける。

「…ちよつと不幸な目にあい続けている友達のためにも、何か仕事を探してこようかと思つてね」

振り向きざまに翔はそんなことを言ってから、智志に玄関を開けるように催促するような素振りを見せた。

「それはありがたいことで…好意はしっかりと受け取っておこうか」
そうついいながら、玄関の引き戸を開けて、翔が外に出れるようにした。

「とりあえず、ペット探し以外で頼むぞ」

「…その保障はできないよ？」

「知っている…まあ、よろしくな」

智志のその言葉に返事をするでもなく、翔は出かけていった。

「…まあ、哲哉が居なくなつてからのほうが楽になつたけど…ここを作るきっかけになつたことには礼をいわなければな」

智志は、そんなことを考えながら、今はどこに居るのかすらわから

ない友人の面影を思い出していた。

第5話『智志と祖父』

雑居ビルに囲まれて、アパートのような概観の建物があつた。

外には不釣り合いなほどに立派な看板が掲げてあり、そこには「便利屋 翔」と書かれている。

入り口と思しき引き戸の前には、何かを待っているかのように黒猫がいた。

不意に、引き戸が開かれて、中からこの建物の住人が顔をだして、外にいた黒猫を建物に招きいれた。

「…智志さあ、ここ最近いなかったみたいだけど、どこ行つてたの？」

けだるそうに質問を投げかける声が建物内に響き渡った。智志と呼ばれた男が、その声に答えた。

「田舎のじいさんの葬式に行つてたんだよ。大体、お前だつて俺が出かける数日前から顔出してなかっただろ？」

聞かれた質問にぶっきらぼうに答えながらも、質問返す声が響く。

「…女には色々あるんだよ」

冗談っぽく、それでもどこかけだるそうな声のまま答える声が響く。

「おじいさんの葬式ねえ…それはご愁傷様」

そんな言葉が智志に投げかけられた。そのまま智志は黙り込んでいたので、それに痺れを切らしたように、言葉を続ける。

「そのおじいさんとは仲が良かったのかい？」

そんな質問に、黙っているだけの智志が口を開いた。

「…さあね…ここ何年も会っていなかったし、危険な状態だつて知つたのは亡くなるすこし前だったしな」

「ふうん…そうなんだ」

これ以上話しても、面白い話は聞けそうにないと思つたのか、声の

主は早々にこの話題をそらそうと生返事で答えた。

「でも…まあ、子供の頃は入り浸っていたはずなんだけどな…何をしていたのかが思い出せないな」

智志は、なんとなくそんなことをブツブツとつぶやき始めた。

「そういえば、この家は…元々じいさんの趣味で作られていた気がするけど…」

何かを思い出すように、智志は立ち上がり部屋を見渡すようにしながら動き始めた。

「なに？…財産とかそういうのが埋まっているとか？？」

興味が失せていたが、智志の行動を見て声を上げた。

「翔…そういうのはここにはないんだよ。…俺の両親がここをもらったときに散々探したんだからな」

「チエツ…つまんないの」

翔と呼ばれた女性の声はそんな文句をもらした。

「とはいえ…あのときの両親とか、俺にとっての財産じゃないって言うだけで、なんか見つけたような気がするんだよな…」

「ふうん…変わった置物とかはこの家に多いけどそういう類？」

「アレはじいさんの持ち物じゃない。…でも、置物…か…」

「へえ…じゃあ、誰の置物なの？？」

「…てか、人の家を荒らし見ているな…あの置物は…まあ、知り合いのだ」

「…そういうことにしておくよ」

翔と智志がそんなやり取りをしている中、翔が思い出したように声を上げた。

「そういえば、おいてある置物中に趣味…というか、ジャンルというか…そういうのが明らかに違うのがあったけど…？」

「趣味が違う？」

「うーん…なんていうかなあ…小さな墓石みたいなの…そんな感じの置物があった気がするけど」

そのあいまいな返答を聞きながら、智志は黙って考え込み始めた。

「…智志、どうしたの？」

その様子を見て翔が智志に訊ねた。

「墓石…そういうことか…その置物はこの家のどの辺にあった？」

何かの答えに至ったらしく、智志が声を上げた。

「え？…え…と…2階のどつかだったと思うけど…よく覚えてないなあ」

翔があいまいにそんな返事をする、智志は電話を取り出してどこかに連絡をした。

「…もしもし？…智志だけど…そう、その件で…」

数分間の電話の後、智志は2階に上がって行った。

「…なんだったんだろ？」

翔はいまいち状況がわからないまま声を上げていた。

1時間ほどして、2階に上がっていた智志が降りてきた。

その頃、翔はまどろんでいて智志が何を言ったかよく聞き取れなかったが、また数日事務所をあけるようなことを行っていることだけはなんとなく聞き取れた。その言葉に対して翔は、「僕のご飯は？」と、そんなことだけ訊ねた記憶があるが、「適当に食っておけ」という智志の返答まではちゃんと聞き取れずに、そのまま眠りに入ってしまった。

数日後…。

事務所の入り口が開かれて、智志が事務所に戻ってきた。

「おーい、翔…いるか？」

『適当に食っておけ』と言ったものの、ちゃんと食事をしていたかが出かけた後に気になっていた。

「…なに？」

不機嫌そうな声で翔が智志の呼びかけにこたえた。智志はその声を聞いて少し安心したが、翔のTシャツ1枚しか着ていない姿を見てギョツとした。

「おま…どうしてそんな格好しているんだ？」

「仕方ないだろ…ここには僕に合う服なんてないし、この状態じゃないと色々と不便だしさ！」

怒りをあらわにして、翔は智志に言葉をぶつけた。

「悪かったって…お前のおかげで、1つ問題が解決したからさ…これ、お土産な」

そういいながら、智志は手持ちの荷物を翔の前においていった。

「こ、こんなの貰っても…まあ、今回は許してあげても…」

そういいながら、次々におかれるモノを見ながら翔は目を輝かせていた。

「…そういえば、解決した問題っていうのは？」

翔は、智志が置いたさまざまな高級そうな缶詰を選別しながら訊ねた。

「ああ、じいさんが残した遺言と言うか…その中に、じいさんが生前に自分の墓石のモデルを作ったことがあったらしい話があったんだよ」

「ふうん…それが、智志の持っていた墓石？」

「まあ、そんなところ」

「でも…なんでこの家にそんなものがあつたの？」

「…じいさんは、この家ができる少し前に大病を患ったことがあつたらしくて、そのときに作ったものらしいんだよ」

「へえ…で、家ができたときにここにおいていったんだ」

「まあ、じいさん自身もずっと忘れていて、今回の入院で思い出したらしくて…」

「じゃあ…孝行な孫になれたってことかな？」

「おかげさまでな…だからこの土産の量ってことさ」

「…ちよつと足りないかな？…足りない分は今度までに用意しておいてね！」

「…ったく、仕事を持ってきてくれたら考えといてやるよ」

智志は翔とそんなやり取りをしながら、事務所のいつものソファに腰を落ち着けた。

「悲しんでばかりもいられないけどな…じいさんも満足してくれ
たかな？」

と、そんなことを考えながら、葬式の準備に出かける前にそのままにしてしまった仕事をはじめることにした。そんな智志の姿を見ながら翔は一言声をかけた。

「まったく…こんなときくらい休めば良いじゃんか…どうせ仕事なんて来ないんだしさ！」

そんなことをいわれたが、そんな言葉を気にせずまっただけと言う気持ちで仕事を再開した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1422f/>

「ベンリ屋 翔」の日常

2010年10月11日11時43分発行